

切支丹の隠れ里・北摂「千提寺」を訪ねて

私が住む大阪・茨木市の山奥に隠れ切支丹の村里がある。九州の隠れ切支丹については広く知られているが、北摂地方の切支丹遺跡については意外と知られていない。私がこの地の隠れ切支丹の存在を初めて知ったのは高校生の頃であった。しかしそこを訪れたのは社会人になってからである。山間に美しい棚田が点在するのどかな村里の風景に心惹かれて何度かサイクリングで訪れた。この春、私は久しぶりにこの村里を訪れてみた。しかし今その近くを第2名神が通る工事が始まり丘や畑田が削られ無残な姿をさらけ出している。工事で見つ

かった多くの切支丹の墓も保存されることなく埋められてしまったと聞く。
千提寺・下音羽と呼ばれるこの村里で戦国時代の切支丹遺物が発見されたのは1919(大正8)年のことである。発見者は茨木在住の住職・藤波大超氏である。個人的に北摂三島地方の切支丹の調査をしていた方で、ある時千提寺地区の旧家である東家の当主・藤次郎氏からクルス山と通称されている裏山に墓石らしきものがあると聞き、二人でその石を探し出してよく見たら「慶長八年正月十日上野マリア」と刻まれていた(右写真:茨木市教育委員会資料より)。慶長8年といえは秀吉が死去した5年後の1603年で家康が開幕した年でもある。墓標の上には[二支十字]の千が刻印されている。まぎれもない切支丹の墓石である。ということは秀吉が切支丹宗禁止・伴天連追放令を出したのが1587年、切支丹大名・高山右近が棄教を拒否して領地没収、前田家お預けとなった年である。以来各地で切支丹狩りが始まったとされるが、まだそれほど厳しくなく北摂の山奥ではまだ切支丹信仰が続けられていたことになる。墓石が発見されたとき東さんが“うちに開けてはならんと言いつた古い箱がある”と言うので藤波氏がぜひ見たいと懇願した。東さんはしばらく渋っていたそうだが意を決して開封してみたら中からザビエルの肖像画やマリア十五玄義図をはじめ木製のキリスト磔刑像、その他口ザリオなどが出てきたのである。驚いた両氏はそれではと村の旧家を説得し調べてみるとあちこちの家の蔵や屋根裏から切支丹の遺物が沢山出てきたのである。村人たちは自分たちが隠れ切支丹の子孫であるとはそれまで知らなかったという。ところが意味はわからないが昔から口称されていたというオラショを覚えているというお婆さんたちまで現れた。これを唱えとお巡りさんに捕まると禁句だったということであった。これらの遺物の発見に驚いたのは彼らだけではなかった。そのニュースは瞬く間にメディアに乗り、また日本のカソリック教会を通じてローマにも伝えられた。そして1926年、東洋の新しい聖地としてローマ教皇使節一行がこのひなびた千提寺にまでやってきたのである。日本にこのような貴重なザビエルや伴天連らの時代の遺物が数多く保存されていたことに世界中が驚き第



「上野マリア」墓石拓本(大石一久氏提供)



一級の資料として評価されることになった。その一部を紹介する。
左の玄義図(イエスの一で示したもの)は千提寺遺されたもので現在京大所蔵。下部の竹筒に巻か



代記を図解の原田家に総合博物館に入れて入って

いた。これとほぼ同じものが東家にもある。右隣は東家に遺されたザビエル肖像画(現在神戸市立博物館所蔵)。いずれも狩野派の日本人画家が和紙に描いたものとされる。右は東家から出たキリストの磔刑木像で横の銅筒に腕を外して入っていた。

私は4~50年前一度東家を訪れたことがある。私の自宅から10数キロしか離れていない山里の切支丹遺跡や歴史に興味がわき、厚かましく話を聞きにでかけたのである。見知らぬ私に親切に対応していただいたのは



多分当時の当主・東藤次郎氏ではなかったかと思う。その後もう一度職場の同僚たちと東家とそこからさらに数キロ奥の下音羽地区にも出かけた記憶がある。今年四月末、バスに乗って久しぶりに干提寺を訪れ、東家(右下)に隣接して1987年に建てられた茨木市立キリシタン遺物史料館(右上)を見学した。干提寺のバス停から山道を徒歩で15~20分である。



小さな史料館で専任の学芸員はおらず近所の人交代で受付をしている。このような辺鄙な史料館にはよほど物好きでないと訪れる人は少ない。この地区から発見された遺物の多くは大学や他所の博物館に寄託されたり、個人的に所蔵されたりで史料館に展示されている数はそれほど多くはない。墓石などは寺の手水鉢や礎石にされたりしているものもあるがいくつかは現地で保存されている。ではなぜこんな山奥の地にキリスト教信仰が生まれ、今日まで遺物が伝えられたのか?

フランシスコ・ザビエルと高山右近

日本に初めてキリスト教を伝えたのはフランシスコ・ザビエル(Francisco Javier)である。1502年スペインのバスク地方で生まれ、パリに出て宗教学を学び、学友とイエズス会を結成、やがてキリスト教の一会派としてローマ法王の認可を得、東南アジアへの布教活動を目指してインドに渡りゴアに活動の拠点をついた(1542)。イエズス会の紋章はI. H. S.で上のザビエル画像にも描かれている。Iesus Hominum Salvator(イエスは人類の救世主)の頭文字である。当時スペインやポルトガルはインドや東洋との交易を目的に海外進出を図っていた、いわゆる大航海時代で、現地人の説得にキリスト教を利用したのである。伴天連(Padre・神父)たちも無料で船に乗せてもらう代わりに渡航先で布教活動を展開しながら商人たちのお先棒を担っていたというわけである。彼ら商人たちの最終目的地はマルコポーロの本で知った「黄金の国日本」であった。ところでザビエルがマラッカで布教中、一人の日本人ヤジロー(または安次郎)と出会う。彼は薩摩で罪を犯し、山川からポルトガル船にまぎれてマラッカに密航したという。そこでザビエルと出会いキリスト教に帰依、日本人最初の切支丹となった。そして彼から日本のことを聞き、日本での布教を決意したザビエルは1549年ヤジローとともに鹿児島に上陸した。(実はそれより6年前ポルトガルの船が嵐で難破し種子島に漂着、鉄砲を伝えたと言われる) 上陸した彼らがどのようにして薩摩藩主島津貴久と会うことができたのかわからないが伊集院の一字治城で会見し、スペインとの交易とキリスト教の布教許可を取り付けることに成功した。現在城跡に会見の碑がたっている(右写真:情報誌「西さつま」より)。

ザビエルは早速九州各地を布教する傍ら、ゴアのイエズス会に伴天連たち

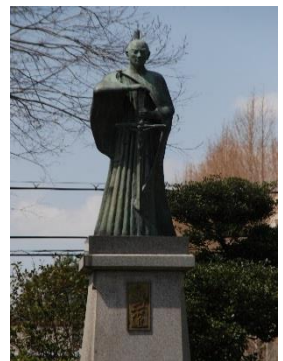
ザビエル会員の地記念碑
1999年はフランシスコ・ザビエルが1549年8月15日鹿児島に上陸の第一歩を記してから450年の記念すべき年でした。450年を記念し、鹿児島をはじめ全国各地で歴史を振り返り、スペインやポルトガルなど文化交流を促進する様々なイベントが行なわれました。



の日本への派遣を要請、さらに本州への布教許可を取るべく山口を経て堺に上がり京の都を目指した。ところが当時の都は応仁の乱で焼け野原と化し、世は戦国時代へと突入していて布教どころではなかった。彼は失意のうちにいったん山口に退去、そこで彼が考えたのは日本をキリスト教化するには日本が師と仰ぐ中国を教化すれば日本はそれに倣うであろうと。そして滞在 2 年で彼は中国マカオに渡り、そこを拠点に布教を開始したがほどなく病に倒れ 1552 年道半ばにして死去した。しかし彼の遺志を継いで多くの伴天連たちが来日、戦国大名三好長慶や信長らの支援を得て近畿、東海各地でも布教を広げて行った。門徒宗など仏教きらいの信長にとって切支丹はむしろ welcome でその教義よりも彼らが持ち込む珍しい南蛮舶来品や鉄砲に惹かれたからであろう。一方、三好長慶も本拠地・四国阿波から中央政界を目指して畿内に進出、幕府の重臣細川晴元に臣従した。当時晴元は高槻市富田を拠点として將軍に代わって幕政を執っていた(芥川政権とも呼ばれる)。やがて家臣長慶は芥川城主になり(高槻市原のちかくに城跡が残っている。また富田・普門寺には晴元の墓がある)畿内一円を支配した。彼はキリスト教にも理解を示し、信長と違って仇敵を殺すなどせず茶の湯に親しむ温厚な武将だったという。長慶亡き後、家臣の松永久秀らが將軍足利義輝を殺害、義輝の弟・義昭が信長の支援を得て後を継ぎ信長とともに上洛した。この時信長は三好・松永一派を駆逐して芥川城に入城、半月ほど滞在している。(当時芥川城は京都と大阪の中間に位置し古くから交通の要として経済的・戦略的に重要な拠点であった。武田信玄に追われた信濃の小笠原氏も一時この芥川城に身を寄せていた由である。先日飯田市に行ったとき天竜峡の近くに旧小笠原家書院を訪ねたがなかなか見ごたえのある遺構である)。

信長より先に義昭の將軍職就任に尽力したのが和田惟政で、その功により後日芥川城を与えられた。やがて惟政はこの山城を家臣の高山飛騨守とその息子の右近親子に託し自らは平地の高槻に城を移した。しかし惟政はほどなく荒木村重の家臣茨木城主・中川清秀に討たれた。高山父子は村重に降伏して家臣になったため惟政のいた高槻城を与えられて北摂を支配することになった。**(右写真は高槻城跡に立つ右近像)**

茨木市千提寺地区に隣接して高山という集落があるが(現在は大阪府豊能郡に属する)、かつては飛騨守ら高山氏の所領地であった。右近はそこで生まれたという説と飛騨守が城主だった奈良県宇陀郡にあった沢城で生まれた説もある。和田惟政もキリスト教のよき理解者だったらしく何人かの伴天連とも親交があったようで、当然高山父子も伴天連と接する機会が多くあったのであろう、フロイスとも親交が深かったという。



その結果、高山父子は日本人伝道師ロレンソ(山口でザビエルから受洗)から洗礼を受け切支丹になったとされる。1563 年、右近 11 歳の時である。そして右近 21 歳の時、父飛騨守の後をついで高槻城主となった。当時の高槻を含む北摂地方の人口は約 3 万人、その 8~90%がキリスト教に帰依したという。右近は 1574 年高槻城下に天主堂を作り、伴天連や伝道師たちを招聘した。**(現在城跡の近くに建つ高槻カソリック教会)**



彼らの活動は山奥の千提寺にもおよび、伝道集会所を設けるなど活発に布教していた模様である。フロイスの記録によると千提寺・下音羽地区にオルガチーノとビデンテ修道士が 1 ヶ月

滞在して 233 人が受洗したと記されているそうである。

話は少しそれるが、1578 年村重の信長への反逆事件が起こり、信長は村重の居城・有岡城(伊丹市)を攻撃した。当然村重の配下にあった右近にも織田の手が延びたが、切支丹ということもあってか、あるいは武将としての器量を見込んでか殺すことはせず、信長は親しかった伴天連ウルガンティーノを使者として送り込み降伏を勧めた結果、それを受け入れることで信長から高槻・北摂の領地を安堵されたと言われる。

高槻での右近の宗教活動を支えたもっとも有名な伴天連の一人がヴァリニャーノ神父である。彼はゴアおよび日本でのザビエルの遺志をついでイエズス会から派遣され、日本ではフロイスを通訳として布教活動を展開した一人である。右近は彼を先導師にして城下で領民こぞって盛大な復活祭を催したという(1581)。ヴァリニャーノは三度来日し 26 聖人殉教の收拾のほかマカオに日本人のための神学校建設など日本の布教活動に尽力した偉大な伴天連である。

では右近はなぜ戦場では人を殺さねばならない武将の身でありながらキリスト教に入信したのであろうか。当時多くの武将が切支丹になっているが、中には欧州との交易から利を得る手段として入信した大名や商人もあろう。しかし大部分はいつどうなるかわからない凄惨な戦国の世から救われたいという深い気持ちで救世主イエスを信じたのではなかろうか。そういう気持は戦争で地獄をみなければなかなか理解できないことであろう。右近は決して非戦論者ではない。戦争のない平和な世を作るには誰かが日本を(たとえ武力を使ってでも)統一できる人物が必要、それが信長や秀吉ではないかと考えて彼らに従ったのではあるまいか。ところがその信長が天下統一を目前にして倒れ、あとを継いだ秀吉は天下人になっても戦争を繰り返す、挙句の果てには朝鮮出兵(1592)、右近の思いとはほど遠い世が続く・・・。

右近は 1585 年、秀吉の命で高槻から明石に領地替え、改めて明石の町作りと布教活動に専念していたが 2 年後突如秀吉の切支丹禁制及び伴天連追放令で右近も棄教を迫られたが頑として応じなかった。そのため領地を没収され、博多や肥前平戸など転々とした後加賀前田家にお預けとなった。しかしこの禁教令は秀吉健在中はそれほど厳しくはなかったらしく各地で布教活動が続いていたし伴天連も滞在していた。右近も金沢に移ってからとりわけ門徒宗の強い金沢にも天主堂を建設している。私はこの禁教令は秀吉直々ではなく一部の取り巻きの画策であったと思っている。信長を信奉していた秀吉のこと、彼自身は南蛮好みもあって特に切支丹を嫌っていたとは思えない。ただ取り巻きにとっては南蛮交易で財をなす大名や商人の台頭が将来豊臣家の災いになる、あるいはデウスなるものへの信仰が城主や領主をないがしろにしかねないなどを危惧したのではあるまいか。その証拠に秀吉の死期が迫ったところから急に切支丹狩りが強化され、長崎で 26 人の切支丹が見せしめに処刑された(26 聖人殉教)。北摂地域でも取締りの手が伸び多数の切支丹が逮捕され棄教の迫害を受けたと言われている。それでも千提寺の山奥や九州では根強く切支丹の信仰の灯は消えることはなかった。彼らにとって本当の試練・苦難が忍びよってきたのは 1613 年家康による全国禁教令である。伴天連および切支丹聖職者の国外追放が本格化し、金沢にいた右近にも国外退去令が来た。仲の良かった前田利家もすでに亡く、さすがの前田家も幕府の意向(威光)には抗しがたく、1614 年右近はマニラに向かうことになった。むしろ彼は喜んでそれを受け入れたという。

なぜ滞在地としてマニラを選択したのかわからないが、多分これにはヴァリニャーノ神父の

手配があったと思われる。彼はこの聖職者や切支丹の国外追放の処置に陣頭指揮している。一方、皮肉にも家康が禁教令を発布した年に伊達政宗が支倉常長らを太平洋-メキシコ-大西洋経由でローマに派遣している。表向きは仙台へ宣教師を派遣してほしいとのローマ法王庁への直訴である。この30年前1582年には九州の切支丹大名の有馬晴信と大友宗麟らが使節団をインド洋回りでローマに派遣している。所謂天正少年遣欧使節団である。このように日本と欧州の友好交流の芽が出始めたかに見えた矢先、徳川幕府による鎖国政策とともに切支丹迫害が強くなってきたのである。踏絵や密告制度ができて京都、江戸、九州で殉教者が数をまし、あいつぐ切支丹の受難はついに島原の乱をもって最高潮に達した。以来日本のキリスト教は歴史の表舞台から姿を消すことになった。人里から遠く離れて人の目につきににくかった千提寺・下音羽地区といえども例外でなく、信仰の灯もいつしか消え、キリスト教も封印され忘れ去られて今日に至ったということであろう。

なお、もう少し話を付け加えると切支丹の受難は島原で終焉したわけではなく、それからも特に九州、山口県など各地で隠れ切支丹たちが密告され虐殺されてきたのである。開国後も明治政府は禁教政策をそのまま続けており、開国で長崎にいたキリスト教の外国人のもとに潜伏していた切支丹が現れて信仰を告白したことから隠れ切支丹の存在が発覚、600余名の信者が禁教令違反で逮捕、明治政府によって処刑されたのである(浦上崩れ。崩れとは弾圧のこと)。さすがにこの事件は彼ら外国人から欧米各国に伝えられ、外国メディアが残虐極まりない人権問題として報道、日本在住各国公使も日本政府を糾弾する動きに驚いた政府が徳川時代から続けてきた禁教政策をようやく解除したのである(1873, 明治6年)。かくして多くの血を吸い込んだ土壌の上に、間もなく来日したクラーク博士や新島襄夫妻らの活動を通してキリスト教の芽が着実に根づいていくことになる。

話を元にもどすが、いまだに疑問なのは、なぜ山奥の千提寺にザビエル画像やマリア十五玄義図など極めて貴重な物が眠っていたのだろうか？ 市の資料館や文化部に聞いてもよくわからない。伴天連たちが日本に持ち込んだ遺物も然り、世界でここにしかないものばかりである。そんなものを山奥の農家が所持できるものではない。私は高山右近か右近に連なるような地位の高い家がもともと所持していて、秀吉や家康の切支丹狩りの時、見つかるのを恐れてひそかに人里離れた千提寺に移し、信者の旧家に分散して隠したのではないかと考えている。ここで2枚しか現存しない江戸時代初期の日本人画家(狩野派)が描いたマリヤ十五玄義図を比較のため並べてみる。十五玄義図とは15にコマどりして描いたイエス・キリストの生涯絵図である。右が東家所蔵、左が原田家から京大に移管されたもので、どちらも非常によく似ているが、原田家のはザビエルの後ろに聖女ルチャが描かれているなどほかにも少し異なる点がある。なお、これらは同一人物の手になるものかどうか私にはわからないが、右の写真は京大総合博物館及び茨木市役所で夫々入手した資料からのコピーです。これらの資料が茨木の山里で発見された意義は極めて大きい、茨木市や市民の関心度は残念ながら決して高いとは言えません。

